◆スケート部（フィギュア部門）21歳ワカバ◆ 1月2日に誕生日を迎えた樋口だが、昨年は「20歳を満喫できなかった」と不完全燃焼。しかし今年も五輪があり大忙しだ。樋口が一息つく日は訪れるのだろうか

明スポ

五輪内定

新葉（わかば）

4年越しのリベンジ果たし北京へ

明大スポーツ
1月19日 水曜日
令和4年（2022年）
第517号
明大スポーツ新聞
創刊 1963年
編集人 田中 宏太
東京都千代田区神田駿河台1-1-1
〒101-8301 TEL/FAX 03(3233)3788
http://meisupo.net/

香 うどん丸香

♥樋口 新葉（ひぐち・わかば）東京都出身。3歳の頃に母の勧めでスケートを始める。幼少期から数々の大会で好成績を残し、中学2、3年次には世界ジュニア選手権でメダルを獲得。高校1年次にシニアに昇格すると、2年次に世界選手権で2位に入り、同大会自身初の表彰台に上った。明大入学後は1年次に全日本で2位となり、そのシーズンの終盤からトリプルアクセルに挑戦。現在も演技の大きな得点源として組み込んでいる。152㎝

4年前の雪辱を果たした。北京冬季五輪の最終選考会を兼ねた全日本選手権（昨3日開幕、全日本）で樋口新葉（商3＝開智日本橋学園）が準優勝し、2年ぶりの表彰台に返り咲いた。この結果、北京冬季五輪代表に選ぶ4年前に逃した夢の舞台への切符をつかんでみせた。

人生最大の目標

「やったー！」。演技後、喜びを爆発させた。SP（ショートプログラム）を5位で通過。FS（フリースケーティング）内の大混戦で迎えた。「足が震えるくらい緊張した。五輪出場はこっ。会場に緊張が張り詰めるなか、演技が始まった。演技のキモを握る冒頭のトリプルアクセルは着氷で乱れた。それでも、その後は目標としていた「大きなミスのない演技」が続く。特に最後のジャンプを終えた後の表現は圧巻だった。「ライオンキング」の壮大な曲調に乗せた、樋口らしい力強いスピンとステップ。計り知れない緊張と不安をものともせず得る姿に、会場からは自然と拍手が湧き起こった。スタンディングオベーションに包まれると、込み上げる思いから涙が。スケート人生を感じた演技を並公認ながら自己ベストを更新し、見事2位。「人生最大の目標」である五輪出場を決めた。

4年越しの挑戦

2017年、樋口は16歳ながらGPファイナルに出場するなど、平昌冬季五輪代表の有力候補だった。しかし一番の全日本はまさかの4位。わずかな差で代表枠を逃し、涙をのんだ。「もう五輪は無理だ」。目前で逃した夢の舞台。絶望感に襲われ、練習に身が入らない。「人生で一番落ちた」。翌年もケガで思うようにいかず、1年以上うら悩む時期が続いた。

樋口が苦しみから脱却しつつあるのは、昨シーズン。明大に入学し、スケートに対する考え方が変わった。それまでは「ただがむしゃらに頑張っていたが、それでは何も成長しない」。そこで、この年からピーキングに着手した。全日本にピークを合わせるため試合ごとに目標を設定し、ゴールから逆算してシーズンを過ごすようになった。また、技術・トリプルアクセルにも挑戦。大きな武器に着手した。「これなら戦える」。勝ち方を身に付けていた五輪を再び目指すことになった。この年の全日本では2位に入り、3年ぶりの表彰台に返り咲いた。「自信を取り戻した」。2021年は、樋口は10歳ながら、その後はつかんだ手応えを基に着実に成長。コロナ禍も乗り越え、トリプルアクセルの確実性を高めていった。「勝負どころの今シーズンは『苦しいことの方が多かった』。それでも、さまざまな重圧に耐えながら練習に励み、GPシリーズ・フランス大会では3位。全日本でも表彰台に上がり、夢をかなえた。「4年前の経験がなかったら今の自分はいない」。悔しさをバネに、大きく成長した姿を見せた。

いざ夢の舞台へ

演技翌日に行われた代表記者会見。「ほっとしているのと、うれしい気持ちでいっぱい」と、少し緊張気味に答えた。落ち着くまもなく、北京冬季五輪は2月に控える。全日本では封印した、大きな武器に着手した。「どこまで通用するか楽しみ」。「五輪の舞台に立てることを誇りに思って恥かしくない演技を」。明大、そして日本を代表して世界に その名をとどろかせる。

【加川遥稀】

成長支えた㊙ノート

4年間で大きく成長した樋口。特に精神面の成長は著しい。明大に入学し、体育会の選手など多くの友人と親交を深めた。そうした出会いを通して、自分が小さな世界で生きてきたことを実感。「いろいろな考え方を学んだ」。その考え方をスケートにも応用し何事もプラスに変える力を身に付けた。この成長は、常に身の回りから学びを得ようとする姿勢のたまものだ。

また、徹底的に自分を見つめたことも成長の要因。昨年6月から毎日ノートを付けている。ノートには日々の体調や調子、練習での気付きなどを記録。言葉にしづらい感覚を言語化し「調子が悪くなった時も焦らずにできた」。シーズン中も調子が良い時のイメージを保ち続けた。さらに月に1回以上受ける取材は「自分が考え、感じていることを確かめる機会」。そうして常に自分と向き合ったことが「毎日の成長につながった」。精神面で一皮むけ、五輪代表入りを果たしてみせた。

▲ノートはファンからのプレゼント<写真：本人提供>

◆全日本選手権（女子）成績表◆

順位	選手名（所属）	総合得点
①	坂本 花織（シスメックス）	234.06
❷	樋口 新葉（明大ノ／エビア）	221.78
③	河辺 愛菜（木下アカデミー）	209.65
④	三原 舞佑（シスメックス）	206.86
⑤	宮原 知子（木下グループ）	206.51
⑥	渡辺 倫果（法大）	199.15

◆北京冬季五輪代表選考の流れ◆

1 全日本選手権 → 1人目確定

2 全日本2、3位 GPファイナル出場権獲得者 国際スケート連盟（ISU）今季ベストスコア上位3人 → 2人目確定

3 3で漏れた中から 今季世界ランク等を踏まえ総合的に選考 → 3人目確定

演技後ガッツポーズを見せる樋口<撮影者：加川遥稀>【切り込み】表彰台で笑顔を見せた

◆21―22シーズン成績表◆

日程	大会名	SP順位（順位）	FS順位（順位）	総合順位（順位）
6・26～27	アクアカップ	67.06（1）		67.06（1）
6・26～27	アクアカップ		116.15（1）	116.15（1）
8・9～12	げんざんサマーカップ	62.40（4）	131.01（4）	193.41（4）
8・21～22	東京夏季大会	74.02（1）		74.02（1）
10・2	ジャパンオープン		136.27（1）	136.27（1）
10・29～31	GPシリーズ・カナダ大会	69.41（5）	135.86（5）	205.27（6）
11・11～14	オーストリア杯	79.73（1）	109.70（4）	189.43（1）
11・19～21	GPシリーズ・フランス大会	63.87（6）	141.04（3）	204.91（3）
12・22～26	全日本選手権	74.66（2）	147.12（2）	221.78（2）

●ホイッスル●

「場合によっては もう応援してほしくないと思っています」。この一文は、親衛隊部の綱原康弘総合監督が箱根駅伝直後のブログで書いたものだ。選手や部全体に向けて心ない言葉を送った。OBへのメッセージ。この一文を読んだ時に「国際総合監督がすぐ辞めなんだと感じる」。ブログ取材の後、箱根駅伝を涙しみにしていた。結果は残念だったかもしれないが、試合後選手たちのSNSに寄せられた厳しい雑言（はりそうこん）をとても見てはいられなかった。◆学ぶスポーツの在り方とは何なのでしょうか。選手たちは、プロではない。選手ばかりが注目を集め、学生たちが「スター」の選手は存在している。けれども、あくまでも選手はみんな大学生。ファンの方のお金を基に生活しているプロとは違う。プロは結果が出せなければ厳しい言葉を浴びられることも起こり得る。しかし、学生は立場が違ってしょう。選手として活躍して卒業していけるのはほんの一握り。大半の選手は最終的に社会で働かなければいけない。社会人として通用する人材を送り出すために、学生スポーツは存在するのではないだろうか。◆お金の絡まない、純粋な学生たちの熱いプレーに魅力を感じている人も多いはずだ。八幡山で部と競走部の寮はお世辞にも清潔な選手たち。サッカー部の寮は世間的にもありきれいとは言えない。あの環境の中で、全国上位に食い込んでいるだけで十分に立派。文句はなく、温かい視線と目に見える支援をしてほしいかがだろうか。総じて、結果がだろうがあれ競走部の皆さんには拍手を送りたい。百聞な言葉が聞こえないように大きな音で

【田中佑太】

本人直筆サインが当たる!!詳細はこちらから

年間購読のお申し込みは 03-3233-3760

読み終えた新聞はお持ち帰りください

希望をカタチに
Shaping What We Want!
校歌は私たちの力だ！
明治大学創立１４０周年記念式典
明大アイデンティティ我等に燃ゆる希望あり
▼動画をチェック!!
明治大学連合父母会 会長 吉野 由紀

レイアウト 伊藤理子